「世界文学」と「世界文学史」

伊藤　徳也

「世界文学」のことをゲーテを始め様々な論者や研究者が論じてきたことは知っている。私個人は、特に考える必要もないどうでもよいことだとずっと思ってきた。今回お題をいただいたので、この機会に少し考えてみようと思う。エッセイ風のものでもよいというので、特に勉強もせずに書かせていただく。

「世界文学」というのは、たぶん「世界中の文学」という意味ではないように思う。それならとりたてて焦点を当てて論じる必要はなさそうだからだ。「世界文学」という看板のもとに世界中の文学のサンプルを集める、というのは俗にはおかしくないだろうし、そういう時に「世界文学」という名前は便利だろう。「世界文学全集」というのはそういうコンセプトだろう。ただ、そんな「世界文学」が何か重要な議論の的になるのかどうか、私にはちょっと想像がつかない。

私は最近、日本と中国の近現代文学史全体を平行比較するつもりで、授業も研究も行っている。近現代文学ではない。近現代文学「史」である。歴史である。なぜか。日本近現代文学と中国近現代文学を性急に比較しようとすると、ナショナリティをめぐる文化の政治学に容易に巻き込まれてしまうからだ。それは簡単に日本と中国、日本人と中国人の比較になり、センシティブな闘争の元になる。私は基本的には闘争が嫌いだ。（ついでに言えば、ネゴシエーションも嫌である。）ナショナリティをめぐる文化の政治学では、驚くほどナショナリズムを刺激されてしまい、傲慢なナショナリズムも謙虚なナショナリズムも、多くの場合傷つけられる。研究態度としての歴史主義は、そうした性急な闘争に理性的な「待った」をかけ、素朴で純粋な学問的好奇心とディレッタンティズムへの欲望をくすぐるという一面がある。（いわゆる「歴史問題」はむしろ逆にナショナリズムの闘争の場になっているが。）厳密な意味での「歴史主義」ではないかもしれないが、そういう歴史に対する態度もある種の歴史主義と言ってもい

いと私は思う。

「世界文学」も私はそれを、まずは、そういう歴史主義から考えてみたいと思う。つまりまず「世界文学史」ということから考えたい。むろんそれは、各国各地域各言語の文学史の単なる寄せ集め、集積ではない。世界中の作家や読者を強力に引きつける文学上の潮流や方法論的特質の歴史が、世界文学史の本流をなすと考えるのである。例えば、十九世紀前半はロマン主義、十九世紀後半はリアリズム、二十世紀はモダニズム、二十世紀八〇年台は魔術的リアリズム、といった流れが世界文学史の本流をなす、そして十九世紀末に成立したリアリズム長編小説のスタイルはその後長く影響力を保ち続けた・・・云々。もちろん、そうじゃなくて、もっと力強い潮流が他にあっただろうとか、いろいろ議論はあるだろうが、とにかく、時代時代で最も強烈な刺激を作家やエリート読者群に与え新鮮な驚きを与えた潮流や傾向によって、世界文学史の本流はある程度描けるような気がする。むろんそこには翻訳が介在していたであろうし、また、その流れは結局抽象化された流れにすぎないとも言えそうだ。本流の他に、支流や傍流やあるいは滞った深い沼や池があるだろうし、そんなまとまりとして捉えられないような個別の細々とした作品だってあるはずだ。

しかし、私にとって重要なのは、そうした個々の作家やエリート読者がどのような潮流や作品に刺激を受け、憧れ、仰ぎ見、そしてどのように受容、模倣あるいは自作に適用したか、である。現在の私達が歴史の高みに立って、客観的に何が本流だったのかを吟味し認定することではない。さまざまな地域の個々の作家や読者一人ひとりにとって、その時、何が彼あるいは彼女をゆさぶり、うちのめし、感嘆させたか、である。そうした一種の読者論的関係の一つ一つも世界文学史の中の欠かせない一要素だと私は思う。

さて、それが「世界文学」という枠組みだとそうはいかなさそうに感じる。やっぱり「世界文学」というのは、「世界文学」と呼ぶに足る作品によって構成されるもののように、私などには思えるからだ。「読書メーター」などに記された感想などは「世界文学」の枠の中からはじき出されるか、少なくとも、付随的なものになるのではないだろうか。

また、例えば、国際的規模では多くの読者を獲得していないが、その言語圏内では、コアな読者を楽しませ続けている作家がいるとする。それも世界文学史の中の重要な一作家としてカウントすべきだと思うが、「世界文学」の中に入るのかどうか微妙な感じがする。やっぱり歴史主義が欲しいと感じる。

ここ数年大学院の授業で中国の作家閻連科の作品や関連資

料を院生と読んできた。閻連科はおそらく「世界文学」を強烈に意識している現役中国人作家だと私は思う。それを彼が“世界文学 shijie wenxue”ということばで意識しているかどうかは別にして、彼の著述を読むと、彼がいかに熱心に世界中の文学を幅広く渉猟し、咀嚼し、自らの作風を更新させようとしているかがわかる。実際、彼の他の作家に対する数々の論及を読んでいると、本当にそんなにもたくさん海外や国内の作家の作品を読んでいるのか訝しく思えるほど、おそろしく大量の作品について語っている。有名なヨーロッパの作家はもちろん、マルケスらラテンアメリカの作家の多くの作品、日本の作家のもの、中国の作家のもの、それも、代表的作家の代表作だけではない。日本の作家では、川端康成や遠藤周作のさほど知られていない短編なども読んでいる。徳田秋声などにも賛辞を送っている。中国の作家として、さほど全国的には知られていない地元河南の多くの無名の作家の作品なども、ほんとうにたくさん読んでいる。

まだ日本語に訳されていないが、中国大陸で出せず台湾で出版した『四書』などは、凄惨な中国現代史の一コマを下敷きにした寓話風の作品だが、明らかに『聖書』を意識しているし、四冊の書物を断片的に配列したという構成も、そして文体も、ほぼ常軌を逸した作りだ。（ミステリーの語りも取り入れているのではないかと院生の一人が言っていたが、一つの読みとして有りうると私も思う。）それもこれも、彼が「世界文学」を目指している、あるいは、自分の文学を「世界文学」レベルにせねばならないと確信しているからではないかと私は思う。文学は発展せねばならない、と彼は言っている。常にオリジナリティを求め続けないとだめだと。それが文学のためだし、自分のためだし、読者のためでもあると彼は言う。彼の作品は、当初は基本的に質実なリアリズムだった。その殻を徹底的に打ち破ったのが一九九〇年代後半の『日光流年』（日本語未訳）だった。あれは本当に衝撃的な作品だった。その後彼は伝統的なリアリズムにはっきりと決別を告げて常に自身を更新し続けている。なので、私は、一読者として、一研究者として、彼を非常に高く評価している。（二〇一六年には実際に駒場に招いて講演もしてもらい、二日間ほど行動を共にしたが、人間としても人格的に尊敬に値する方だと思っている。）

しかし、その一方で、気になることがある。それはつまり、文学の発展に寄与しそうもないような作品、執筆活動は「文学」特に「世界文学」の名に値しないと言ってよいのかどうか、ということである。閻連科は、伝統的なリアリズム（と言っても特に中国の伝統的なリアリズムだが）を批判し、一九八〇年代に例外的に多くの読者を獲得した路遥の『平凡』を嫌悪した。

実は、中国の八〇年代というのは、多くの前衛的な文学作品が続々と発表された時期で、文学の進歩や発展を語る研究者や評論家は、そうした斬新なものばかりを取り上げ論じた。が、そんな中で、中国伝統のリアリズム作法を謹直に守って書かれた路遥の長編小説『平凡』は、陰ながら、非常に多くの読者に歓迎され増刷を重ねた。そして、現在でも新装版が大きな書店には山積みになっている。この作品が多くの読者を獲得した背景には、どうやら、中学高校の教育現場での教師による生徒に対する推薦が（少なくとも一部では組織的に）行われたという事情があったのではないかと私は推測しているが、しかし、つまらない作品だったら、どんなに先生に忠実な生徒でも、それが心に残る作品になるということはないだろう。しかし、この作品がよかったという感想は今もいたるところで聞かれる。こういう作品は「世界文学」にならないような感じがするが、「世界文学史」の中には、重要な一要素として案外簡単に入れられそうに思うのだが、どうだろうか？

ちょっとよく似た事例として、中国人として初めて芥川賞をとった楊逸の事例をあげよう。彼女は成人前に日本語の教育を受けなかった中国人の日本語作家として、その日本語表現が未熟、不十分という方向で取り沙汰されることが多かったのだが、もう一つ議論の的になったのが、彼女の作品の基調が従来からよく見かけられた一般的なリアリズムだったという点である。彼女が「ワンちゃん」でデヴューした時、『文學界』新人賞を獲得したのだが、その際の審査員は、「ワンちゃん」を「近代文学」というのには「現代文学」以前だという含みがある。ウェブの書き込みやブログなどにも、楊逸の作品は古いリアリズムにすぎない、彼女の芥川賞受賞は北京オリンピックに合わせて出版社が仕組んだ非文学的なイベントにすぎない（芥川賞受賞が北京オリンピック開催の二〇〇八年だった）とか、そういう論調が目についた。

しかし、多くの審査員と読者は、そんな文学の発展や進歩を重視する観点を棚上げして、純粋に一読者としてすばらしい読書体験をもたらしてくれる彼女の作品を力強く支持したのだった。私も一読おもしろい作品だと思った。そしてその一方で「近代文学」にすぎないという指摘もそのとおりだと思った。だから「世界文学」というお題に沿って考えてみると、楊逸はたぶん「世界文学」の中には入らないが、「世界文学史」の中には、欠かせない存在として入るのではないだろうか。

考えてみると、「世界文学」というとちょっと遠慮したいような避けたいようなそんな感覚が私の中にはある。それは

どこか権威主義的な、他者に評価や評価基準を押し付けようとするような、臭いというか雰囲気がどこかにあるような気がする。その一方で、「世界文学史」というと、文学を純粋に楽しもうとする一読者の目線に飛び込んでくるあらゆる文学的事象を旺盛に何でも受け入れてくれるような寛容なパワーとやさしさを感じる。

気軽に書き始めたエッセイなので、まともな結論などない。「世界文学」について、ほとんど私の個人的な感覚に即して書いただけである。論文なら確実に確かめるべき事項も本文ではまったく確かめていない。脳裏に残っている記憶だけで書いた。その点はどうかご承知おきいただきたい。

二〇一八年一〇月二四日